

2016年(平成28年)8月21日 四曜日

予定地に絶滅危惧種 屋久島の県道拡幅工事

屋久島の景勝地、白谷雲水峡に通じる県道の拡幅工事予定地で今年5月、環境省のレッドリストの絶滅危惧IA類に分類されるミドリムヨウランの群生地が見つかった。地元の自然爱好者らでつくる白谷山楽会は要請を受け、県が現地調査して確認。会は7月27日、群生地を保護するよう県に文書で要望した。

ミドリムヨウランが群生

山楽会によると、現場は以下のとおり。県道の最奥部となる白谷雲水峡の入り口から約700メートル下った地点。2車線にする拡幅工事に伴って削り取られる予定の斜面に、約30

株が群生していた。現場周辺には橋脚が建てられる計画だ。この工事によって、群生地が消滅する恐れがあるという。ミドリムヨウランはキノコなどの菌類と共生する菌従属栄養植物で、人の手が入っていない照葉樹林に自生する。花びらの長さは1センチほど、4~5月に緑色の花を咲かせる。国内では屋久島で初めて発見され、そ

の後、宮崎県でも確認されている。県道拡幅工事をめぐっては、現場周辺で植生調査を続ける山楽会が一昨年秋、「絶滅危惧種を含め、希少な植物が数多く自生している」と、計画を見直すよう県に申し入れた。これを受けて県は、拡幅予定の県道のうち最奥部までの800メートルの区間について、工事に賛成か反対か住民の意見をとりまとめるよう屋久島町に要請。町に約230件の意見が寄せられ、賛否はほぼ同数だったといふ。

このため町は昨年6月、最奥部から400メートルは拡幅せず、麓寄りの400メートルを2車線化する方針を決めていた。ミドリムヨウランの群生地が確認されたのは、この工事計画区間だ。

県屋久島事務所建設課によると、今夏の調査結果も踏まえ、専門家の意見も聞きながら町と協議して工事計画を立てることに。

山楽会会長の写真家、山下大明さん(61)は「今回の群生地を含め、県道周辺に自生する希少な植物や原生林を守ることを基本方針にしてほしい」と話している。(屋久島通信員・武田剛)



❬ミドリムヨウランが発見された森(左)を前に保護を訴える山下大明さん(右) 屋久島町
❭県道の拡幅工事予定地周辺に自生するミドリムヨウラン=5月22日、写真家・山下大明さん撮影

新種ラン発見 屋久島でも



新種と確認されたタブガワムヨウラン=昨年7月、山下大明さん撮影

命名「タブガワムヨウラン」

大学講師・地元写真家ら

屋久島で新種のランを神戸大の末次健司特命講師(29)と地元の写真家・山下大明さん(61)らが確認し、発見した柄川という地名から「タブガワムヨウラン」と命名した。光合成をせず、菌類に寄生する植物。3日に論文が植物分類学の国際誌に掲載された。

タブガワムヨウランは、樹木の根本周辺にいる菌類から栄養を奪う「菌従属栄養植物」の仲間。7~8月に開花し、長さ数センチほどの花びら6枚のうち5枚が白

色、唇の形をした1枚が紫色なのが特徴という。末次さんと屋久島で植物の分布調査をしている山下さんが昨年7月、島東部の愛子岳(1233.5m)のふもとに広がる照葉樹林で発見した。すでに知られているムヨウランと見られるが、花びらが違っていたため、末次さんらが標本を詳しく分析。その結果、絶滅危惧種のムロトムヨウランに近いが、花びらのほかに雄しべと雌しべが合体した「ずい柱」の形状も異なる

新種と判明した。



タブガワムヨウランを観察する末次さん(左)と山下さん(右)。今年7月、いずれも屋久島町

種が見つかる可能性があつたって屋久島を撮り続けていた。山下さんは「今後も新

種は5例目となる。

タブガワムヨウランが見つかった場所は、人里近くの竹島、黒島で確認した新

種は5例目となる。

タブガワムヨウランが見

つかった場所は、人里近い

照葉樹林帯で国立公園に指

定されておらず、伐採や開

発が可能な地域。40年にわ

り、低地の照葉樹林はしつかり守る必要がある」と話している。

(屋久島通信員・武田剛)